
暗黒日和

アメリカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗黒日和

【コード】

N0002H

【作者名】

アメリカ

【あらすじ】

僕は、彼女のためにいる。彼女の異常な日々を共有し、彼女の異様な表情に酔いしれる。僕は彼女のためにいる……彼女は、僕のためにいる。

プロローグ

その行為は、美しかった。

傍で見れば見るほどに、美しかった。

それは、純白の美しさとは違う。

もっと、別の意味での美しさ。

漆黒の美しさだった。

白が、綺麗すぎて見えないように、

黒が、淀み過ぎて見えないのだ。

僕が見ているのは、彼女。

黒い髪が腰のほうまで伸びていて、さらさらと風に揺られている。

彼女がミュージカルで言う、メインのヒロインだろう。

その行為を見る観客は、僕だ。

僕一人。彼女のワンマンショーに魅入られていた。

彼女の真っ白な肌を、赤が染めていく。

両手でしっかりと握った、ソレが月明かりで銀色に煌く。

目の前の物体に銀色を突き立てる。

一瞬にして、鈍く黒に近い赤に変わる。

物体に馬乗りになり、彼女は笑みを浮かべた。

何度も、何度も、何度も、彼女は目の前の物体に突き立てる。

ドスツと、物体に突き刺さる音が何度も聞こえた。

「いっぱい、いっぱい、いっぱい、いっぱい、いっぱい、いっぱい」

僕は、遠くでその行為を見つめていた。

「いっぱい、いっぱい。あはは、真っ赤だ真っ赤だ」

一体何度、突き刺しただろうか。

彼女は不意に両手に持っていたモノを投げ捨てる。

目の前の物体は、真っ赤な塊となっていた。

原型など、留めてはいない。

彼女は僅かに、その塊に顔をうずめた。

小さな舌が、その塊を這う。

僕は震えた。

あまりの奇行さ故か、妖艶ささえ感じさせた。

「んー、おいしっ」

ペロツと舌を出した彼女は、先程の妖艶さとは違い、

少女のような可愛さを見せた。

赤い雫が、彼女を満たしていた。

塊を少し千切って、口に含む。

顔を赤く染めて、笑顔で美味しそうに咀嚼する。

ゴクツと喉を通る音がして、彼女は満足げな顔をした。

僕は、彼女の行為が完了するまで、ただ見つめていることしか出来なかった。

彼女のシヨールは、美しかった。

その行為が、痛みを伴っていることは判っている。

その先で、誰かが悲しみ、誰かが泣き、誰かが憎悪を抱くに違いはない。

でも、そんな事は僕にとっては、どうでも良い事だった。

この世界では、僕が主人公だからだ。

僕が主人公、彼女がヒロイン。

この定義は、一生変わらないからだ。

でも、彼女の中はどうかだろう。

彼女の中では、僕は主人公なんだろうか？

それとも、ただの通行人Aなんだろうか？

それは、彼女以外判りはしない。

彼女の心の奥底は、僕でも計り知ることには出来ないのだから……。

僕はもう、僕の物語を演じている。

そして、いつか物語が終わるまで……。

僕は、彼女の舞台の上で踊り続けるのだ。

そう、僕だっていつかは、あの赤い塊のようになるんだ。

彼女は、僕と約束してくれた

僕を、殺してくれるって

第一話

1

心象世界1 『異常痛覚』

痛みとは、快樂だ。

与える者も、与えられている者も、快樂の中に身を浸す。

痛いと感じる快樂。

痛みを与えているという快樂。

混ざり合い、溶け合い、愛しささえ覚えてしまう。

そんな自分をおかしいと思ったことはない。

何故なら、欲望に忠実に生きているからだ。

最初は蟻だった。

シャベルでザクザクと刺すと、一瞬で潰れた。

何時間か繰り返していると、土の色が黒くなる。

昔は子供だったから、これが命を殺している行為だとは気付かなかった。

次は、バッタだった。

後ろ足を引っこ抜いてやると、ジャンプ出来なくなる。

足がなくて逃げ惑うバッタを追い詰めて、潰してやるのが何よりも楽しかった。

ライターで炙ったこともあった。

親の目を盗んで火遊びをしている事で、とても興奮した。

しばらくすると、バッタの体が白く、赤く、変わっていく。

もがく姿が、滑稽だった。

目の前の生物の死を、自分が握っている。

生死を支配している、その独裁的感觉。

たまらなく、快感だった。

そうやって、蟲を殺している内に、衝動を抑えられなくなっていく自分が居た。

次はアレを叩いてみたい、次はアレを甚振ってみたい。

次はアレを蹴飛ばしてみたい、次はアレを踏んづけてみたい。

次はアレを抜いてみたい、次はアレを焼いてみたい。

次はアレを切ってみたい、次はアレを刺してみたい。

次はアレを抉ってみたい、次はアレを取り出してみたい。

次はアレをアレしてみたい、アレにアレをアレしてみたい。

アレって何だろう、アレは何だろう、アレって一体何？

アレが判らない、アレがアレになって、アレになる。

アレ？ アレレ？

アレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレ
アレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレ
アレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレ
アレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレ
アレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレ
アレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレ
アレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレ
アレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレ
アレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレ
アレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレ
アレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレ
アレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレ
アレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレアレレ

アレアレアレアレアレアレアレアレアレアレア
レアレアレアレアレアレアレアレアレア

もう、何も見えない。

2

「なあ、水城君」

そう言つて、僕『水城^{みずしろ} 愁』に声を掛けてきたのは、我がクラスの
学級委員長様だった。

見た目は好青年、黒縁メガネが特徴的だ。

通称「メガネ君」でおなじみ『有本^{ありもと} 照』だ。

「ん？ どうしたの？ 有本君」

「最近、”彼女”はどうだい？ 学校に何日も来てないけれど……」

彼女と言われると、僕には数人思い浮かぶんだけど……たぶん、アイツだろう。

「まあ、いつもの事なんだよ。あの子はサボリ癖というか、ノートンキな所があつてさ、昔からそうなんだ」

「へえ、あんなに綺麗で可愛いのに。わからないものだね」

そう言つと、メガネ君はずれたメガネを人差し指で上げた。

「もしかしたらさ、例の事件に巻き込まれたのかもって思ったのさ」

そう、最近僕達の近辺で、ある事件が発生していた。

最初は、小学校にいたニワトリがターゲットだった。

首や足、翼などが所々切り取られていて、あたりは血だらけだったらしい。

次は犬や猫だった。足をハサミか何かで切断されていたり、内臓を抜き取られていたり、気持ち悪い事この上ない。

警察はその程度では動こうとしなかったけれど、一週間前、遂にターゲットは人間になった。

しかも、その子は我が『美揣摩学園』の生徒なのだ。

僕のクラスに居た『宮村 仄香』だ。

彼女の行方はまだ見つかっていない。

警察もやっとなし腰を上げて捜査を始めたらしいけど、成果はゼロ。
不安は募るばかりだった。

メガネ君も、学級委員なりにクラスのみんなを心配しているんだろ
う。

僕みたいなのとは違ってさ……。

「まあ、ここの所物騒だからね。君も彼氏なら、彼女の様子を見て
きたらどうだい？」

メガネ君はニヤリと笑って僕を見た。

「僕とあの子はそういう関係じゃないよ……そろそろ僕は帰るよ。
またね、有本君」

「じゃあね、帰り道は気をつけたまえよ」

メガネ君は爽やかに手を振ってくれた。

……やっと、解放された。

本当に、会話をするとするのは実に面倒だ。

僕には会話をするのさえ苦痛だ。

出来れば、学校にだって行きたくは無かった。

僕の存在価値は、何処にも存在しないからだ。

まあ、あるとするなら……”彼女”のために、かな？

3

数日後、僕は”彼女”の家を訪れた。

ピンポン。

インターフォンを押した。

返事が返ってこないのは、判っているんだけど。

一応、常識的に押してみようと思ったわけです、はい。

自分、水城愁は、常識ある一般人です。

しかし、やはりと言うべきか一分待っても出てこない。

居留守という事もあり得るかもしれないけど、僕の場合は違う。

”彼女”は休日、大体寝ている。

だから、いつもマンションの合鍵は渡されていた。

とりあえずポケットから取り出して、鍵を開けた。

鉄の扉を開けると、締め切っていた為か、異臭が漂う。

鼻をつまむ程じゃないが、思い切り深呼吸できる様な空気じゃない。

”彼女”のマンションは五階建てで、最上階の一番左だ。

マンションと言っても意外に広く、2LDKくらいはあると思う。

僕は部屋に上がると、まずは家の窓という窓を開ける。

換気しないと、この空気はさすがに不味い。

空気に味などないけれど、この部屋の空気が美味しくないのは感覚で判る。

窓を開け終わると、リビングに目が止まった。

ソファに毛布で包まれた物体を発見したからだ。

僅かにもぞもぞと動いている。

僕は冷静に毛布を剥いだ。

ここで眠るのが、”彼女”のクセだった

「起きろ、起きろって。』巡めぐ」

彼女は、足を手で抱えながら丸くなって眠っていた。

僕が”彼女”を揺すり続けていると、目を擦りながら”彼女”は目を覚ました。

目を数回ぱちくりさせた後、僕を見た”彼女”は。

「むぎゅっ!」

抱きついてきた。

「おはよう、巡」

「シユウちゃん、おはよー。あいたかったよ」

まるで子猫のように、彼女は頬を摺り寄せてきた。

「そっか。昨日はどうした? 僕が居なくても大丈夫だった?」

「うん、だいじょーぶだよ。めぐは、きのうずーとおねんねしてたのー!」

体一杯ジェスチャーで、巡は昨日の事を説明してくれる。

しかし、僕が気になったのは昨日の事じゃなかった。

「おい、巡。その服どうした?」

巡の着ていた白いワンピース。

首から胸全体にかけて、真っ赤だった。

「うわー、まっかつかだー」

巡は笑いながら、服についている赤に釘付けだ。

それにしても、”彼女”はいつ見ても面白いな。

腰まである長い髪、整った顔立ち。

モデルでもやってるような、すらっとしたプロポーション。

背は、160くらいだろう。

僕が、170くらいだから、大体そんな感じだ。

そして、彼女は僕と同じ17歳高校二年生。

その高校二年生が、まるでお子様のようにはいしゃいである。

まあ、ある意味今は”お子様”なんだけど。

「ねえねえ、シュウちゃん」

巡が僕の服の裾を引っ張る。

「ん？ どうした？」

「アレ、なにかな？ なにかな？」

巡が指で示したのは、テーブルの上だ。

テーブルの上は異様に散らかっている。

コンビニ弁当の箱とか、ペットボトルとかが、無造作に置かれている。

そこに、お皿が一つ乗せてあり、巡はそれを指差していた。

お皿の上には一つ、異様なモノが乗せてあった。

一瞬目を閉じて、錯覚なんじゃないかと疑ってみる。

が、開けてみても現状は変わらず……。

乗っていたのは、どう考えても犬の頭だった。

茶色い毛並みの、雑種犬の頭だ。

剥製かとも思ったけど、首の切断面は生々しく、骨や肉が見えていた。

頭の半分が切り取られていて、中身がごっそりと抜かれていた。

間違いなく、本物だった。

傍には、血のついたノコギリが落ちていた。

これで、犬の首を切り取ったのだろう。

想像しただけで、吐き気がやって来る。

そういえば、胴体は見当たらない。

しかし、さっきから吐き気を抑えているんだ。

胴体を発見したら、間違いなく僕の口から異様なモノが戻されるだろう。

僕はぐっと堪えて、巡に笑顔を見せる。

「いや、僕じゃないよ。はあ、片付けないと……」

慣れとは恐ろしいもので、僕は犬の首を難なく持ち上げる。

あらかじめ用意している大きめなゴミ袋に突っ込んだ。

「ふう、それにしても、犬って……だんだんレベル上がってる」

正直、慣れたとはいえ、良い気分じゃない。

前回は鳩だったかな？

壁に虫ピンで翼を広げた状態で磔にされていて、首は何処にもなかった。

本当に、”彼女”は毎回、奇怪なオブジェを作り上げる。

「さて、そろそろ始めますか」

僕は、一週間に一度くらいのペースで彼女の家に行って来る。

理由としては、彼女に会いたいたからなんだけど

最近は、彼女の部屋を掃除しに来るのが目的に変わっている気がする。

僕は、ゴミ袋を手にとると、辺りに散らばったゴミを分別しながら袋に投げ込んでいった。

数時間後、掃除は終了。

巡はどうしたかな、と様子を伺う。

「すう、すう……」

再び、ソファで寝息を立てていた。

「はあ、全く」

先ずは一息着こう。

僕はソファの前にあるテレビを点けた。

テレビはちょうど、ニュース番組が放映されていた。

「午後七時頃、東京都××区で女子高生『宮村仄香』さんが誘拐された事件からすでに一週間が経過しました。」
アナウンサーがニュースを淡々と読み上げる。

映像は、彼女が良く使っていた通学路が映っていた。

彼女は、僕が通う『美揣摩学園』みしまがくえんの生徒だ。

しかも、僕と同じ2年B組。

一週間見ていないけど、彼女の顔や仕草は僕でも覚えてる。

容姿端麗、成績優秀、文武両道。

パーフェクトスキルを持った、学園のアイドルだ。

学校に非公式でファンクラブが出来るほど、宮村は人気者だった。

そんな彼女を誘拐するとは……犯人も見るといふものだ。

「そつえば……」

テレビを消して、僕はリビングを出て隣の寝室に向かった。

昨日、“彼女”が僕にメールを送ってきたのだ。

僕は普段、ケータイを使うことは殆ど無い。

メル友っていうのも居ないし、”彼女”からもメールは殆ど無い。そんな”彼女”から久々にメールが来た。

正直、嫌な予感がする。

寝室のドアを開ける。

部屋はダンボールが積まれていて、少し狭くなっていた。

あるのはベッドだけ。

女の子の部屋にしては、殺風景もいいとこだ。

ポケットから、ケータイを取り出し、昨日のメールを確認した。

『面白いのを手に入れたんだ。』

寝室のクローゼットに入れておくから。 縁』

「『縁』の奴、余計な事を……」

僕は頭を抱えた、いつもの事ながら”彼女”のすることは判らない。

そして、彼女の行為は常軌を逸している。

常識外れ、ありえない、異常、そんな言葉がお似合いだ。

僕はケータイを仕舞うと、目の前にあるクローゼットを開けた

ガラガラという音と共に、別の音がした。

「んーっ！んーっ！！」

本当に夢なら、覚めて欲しい。

目が合った。赤く腫れ上がった目が、僕を怯えながら見つめていた。

手は後ろで組まれ、ロープで縛られていた。

口元はガムテープで塞がれ、僅かに息が漏れていた。

茶髪のセミロング。

僕と彼女が通っている『美揣摩学園』の女子制服。

体育座りで押し込まれた、宮村仄香がそこには居た。

僕は頭を抱えながら、現実逃避しようか真剣に考えた。

でも、生憎僕には出来そうに無い。

溜息一つ。。

「はぁ……………」
「ん、びっしょり」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0002h/>

暗黒日和

2010年10月13日01時25分発行